

六十年ほど前、思えば変転の時代でした。当時、考古学の大家と言えば、東は後藤、西は梅原の両先生でした。私は東大の文献史を出て、後藤先生の許へ参じましたが、先生は間もなく亡くなられました。止むなく、人を介して今度は梅原先生の居られた天理大学の付属博物館に赴きました。此処で西谷、金関の両先生から考古学上の実技を教わりました。特に金関先生とは二歳違い。年が近いだけに教えられる事は多く、そして身にしみました。先生とお呼びする所以です。

早々に東大寺山の発掘。目の眩むような毎日でした。遺物の精査中、鉄刀に金錯文を発見、諸方に検出方法を聞き合わせたが結局削り出す他なく、近くの歯科医のご指導を頂くことになり、梅原先生に試行の材料をお願いしました。古美術商の入江氏の仲介で、指頭大に砕けた鉄鏽を井一杯ほど下さったが、よく見ると鏽の小塊は振れ拗れた金属線で繋がったものもありました。

ピンセットで挟み、鹵菌用のグラインダーで鏽を除去、中に残在している小さな破片を繋ぎ、並べました。点検に来られた老先生が奇声を発して跳び上り、私を伴って鏡の出土地を訪ねることになりました。

字数に余裕がない。文体を変える。以下は正報告書である「國華」八五三号（昭和三十八年四月）の、先生の文章に従って述べる。第四図は幅一〇〇mを越える高さ六〜七mほどの土崖が（六mではなく）深さ一〇数mほど湾入して出来た小さな平場で、上方には横穴墓が開口しており、当時は六基を認めた。久大線から四〇〇m以上離れている。採土に依る崖地の湾入としては不自然である。此の平地の途中に、槍頭らしきものに続く遺物の列があり、付近の土